

「看護の統合と実践」受講による看護技術経験状況の変化

毛利貴子、光木幸子、占部美恵

京都府立医科大学医学部看護学科

【目的】A 大学では、臨地実習終了時に厚労省資料をもとに大学独自で作成した看護技術到達度チェックリストを用いて看護技術経験状況を調査している。近年臨地において、学生が経験できる看護技術は減少傾向にあり、卒業後高度な看護実践能力を求められる臨地とのギャップが危惧されている。A 大学では、看護実践能力向上を目的として 4 年生後期に「看護の統合と実践」を開講している。本科目受講生の、看護技術経験状況の変化を明らかにすることで演習の有効性を検証し、卒業前の学生に必要な看護技術習得のための演習のあり方について考察する。

【方法】授業を選択した 4 年生 17 名を対象に、自己記入式質問紙を ME 機器の理論と操作（輸液ポンプ、低圧持続吸引器の取り扱い等）、看護技術演習（口腔ケアと口腔内吸引、血糖測定とインスリン皮下注射）、シミュレーション教育（狭心症発作時の対応）終了後に配布した。調査内容は、A 大学で使用している「看護技術経験状況チェックリスト」のうち、本科目に関連する 53 項目について、「一人で実施できる」～「未経験かつ知識もない」の 9 段階で尋ねた。分析にはウィルコクソン符号付順位和検定を用い、受講前（4 年生前期の臨地実習終了後）のデータと比較した。倫理的配慮として、研究概要および参加は自由意志であり成績に影響しない等説明し、書面にて同意を得た。

【結果】17 名全員より回答を得た。単独で実施できるレベル I では、「患者を誤認しないための防止策を実施できる」他 3 項目にて得点が向上した ($p<0.05$)。指導のもとで実施できるレベル II では、「経口薬服薬後の観察ができる」他 3 項目 ($p<0.05$)、「酸素吸入療法が実施できる」「12 誘導心電図の援助ができる」他 2 項目 ($p<0.01$)、学内演習で実施できるレベル III では「輸液ポンプの基本的操作ができる」($p<0.05$)「低圧持続吸引器の操作ができる」($p<0.01$)、知識としてわかるレベル IV では「針刺し事故後の感染防止対策が実施できる」($p<0.05$)、「低圧持続吸引中の患者の観察ができる」他 2 項目で有意に向上した ($p<0.01$)。

【考察】本科目は、e-learning を用いた予習、複数の臨地事例設定や臨床看護師による指導を取り入れ、より実践的に看護を学ぶ場として構成している。本調査の結果から、口腔吸引・口腔ケアやインスリン皮下注射など侵襲やリスクを伴う技術の経験が向上し、12 誘導心電図、輸液ポンプなど臨地でよく用いられる ME 機器取り扱いの経験状況が向上したことが明らかになった。また、レベル I でも針刺し事故や患者誤認の防止など、臨床実践で重要なリスクマネジメント能力を向上できたことも示された。卒業、就業に向けての動機づけを高めつつ、基本的手技と実践能力の向上を図るには適切な時期、内容であったと考える。